シンポジウム　第１日（8 月 28 日）　14:40～16:10　2 号館 4F 2404

社会心理学を語ろう

企画者：　日本社会心理学会常任理事会

司会者：　浦 光博（追手門学院大学）

話題提供者：　大坪 庸介（神戸大学）
相馬 敏彦（広島大学）
三浦 麻子（関西学院大学・大阪大学）

概要

本学会の基本コンセプトは「社会心理学を語ろう」です。本シンポジウムでもこのコンセプトをメインテーマとし、これからの社会心理学の方向性を考える際の重要なテーマとなるであろう「生物-心理-社会モデル」「社会実装」「研究法」をサブテーマとしました。それぞれに関連して活発な研究活動を続けておられる３名の気鋭の研究者に、ご自身の研究実践を踏まえて大いに語っていただき、ディスカッションのきっかけにしたいと考えています。

大坪 庸介 氏　「生物-心理-社会モデルを語ろう：生命科学と社会科学をつなぐ“にかわ”としての社会心理学」

近年、神経科学・社会医学のような社会心理学に近い生命科学分野の研究が注目を集めている。一方、社会心理学はこれまでも法・経済・国際関係といった社会科学の諸領域と近い関係にあった。それでは、生命科学と社会科学という２つの領域のいずれにも近い社会心理学は、両分野を結びつけ新しい学際的研究を実現するための“にかわ”になり得るのだろうか。本発表では、“にかわ”としての社会心理学の可能性について考えてみたい。

相馬 敏彦 氏　「社会心理学の社会実装を語ろう：起きる前の DV を防ぐ、防ぐための資源をはぐくむ」

恋人や夫婦間での暴力（DV）は、関係が継続される中で生じた「結果」の一つである。こう捉えると、対人関係の維持や、葛藤や紛争の心理プロセスを研究対象に含む社会心理学にはDV予防に有効な知見や研究法が豊富にある。特に「未然に防ぐ」という一次予防アプローチとの親和性は高い。そこで、予防プログラムの開発、実施に至るこれまでの取り組みを報告し、社会実装という側面からみた社会心理学のもつ可能性を考えたい。

三浦 麻子 氏　「社会心理学の研究法を語ろう：心理学研究の心理学とオープンデータ」

「社会心理学には、社会心理学全体に適用できる発見や一般理論はない」(岡, 2016) という。これをして心理学と言いながら理（ことわり）を追究しない学問と揶揄するか、特定のドグマに囚われない学問とむしろそれを強みとするか。ここでは後者の立場から、ではその強みを活かすためにわれわれは何に注意を向けるべきかを 「心理学研究の心理学」 「オープンデータ」という２つの切り口から考えたい。

WS1 ワークショップ　第 1 日（8 月 28 日）16:20～17:50　2 号館 4F 2402

「心」の概念工学

企画者：　唐沢 かおり（東京大学）・戸田山 和久（名古屋大学）

司会者：　唐沢 かおり（東京大学）

話題提供者：　戸田山 和久（名古屋大学）
橋本 剛明（東京大学）
鈴木 貴之（東京大学・非会員）

指定討論者：　太田 紘史（新潟大学：非会員）

概要

社会心理学は、日常的に私たちが使用している「概念」について、その認知や理解の背後にある構造を探求し、その成果を社会的行動の機序の解明や実社会の課題解決に用いてきた――いわば「概念を科学」してきた――領域である。概念工学は、このような社会心理学と、概念分析に携わってきた哲学との協同による展開の一つであり、「われわれの生にとって、あるいは人類の生存にとって重要な諸概念を、よりよい社会やよりよい個人の生き方に貢献することが可能となるように、設計ないし改訂（つまりエンジニアリング）することを目指す」プロジェクトである。

概念工学の対象となるべき「概念」は多数存在するが、本ワークショップでは、抽象論を避け具体的な課題を明確化するという目論見のもと、「心」の概念工学をターゲットとする。近年、心の知覚が道徳的判断や行動に影響することを示す実証的知見が積み重なっている。私たちが、心をどのようなものとして理解しているのかを明らかにした上で、その理解を基盤に「知覚される心」概念を適切に構築することは、社会的関係の安定、支援や加害、また社会秩序と個人の自由など、「よりよい社会や個人の生き方」とかかわる緒問題の考察に不可欠であり、まさに概念工学が取り組むべき対象としてふさわしい。さらに、「心」は心理学者が直接の探求を行っている対象でもあり、その機能に関する知見と、素朴な心概念の理解との連携という課題についても、概念工学のもとで考察することができるだろう。

話題提供では、戸田山が概念工学の目的と社会心理学がなしうる貢献への期待を述べる。次いで「心」の知覚と道徳的判断との関係に関する社会心理学的知見についての展望と課題の整理を橋本が、社会心理学の知見を概念工学に用いる際の課題と哲学の貢献を鈴木が論ずる。指定討論では、心の哲学、道徳心理学に詳しい太田が、哲学と社会心理学の協同がなしうる可能性について考察を行う。これらの議論と討論を踏まえ、社会心理学と概念との関わりや、「よりよい」という規範的問題に対して取り得る立ち位置などについても、参加者各位と議論を深めたい。

WS2 ワークショップ　第 1 日（8 月 28 日）16:20～17:50　2 号館 3F 2301

巨大・複雑系システムにおけるリスク想定：宇宙分野と原子力分野のコラボレーションをもとに

企画者：　木下 冨雄（京都大学名誉教授・名誉会員）

司会者：　木下 冨雄（京都大学名誉教授・名誉会員）

発表者：　中村 大地（宇宙航空研究開発機構 (JAXA)・非会員）
作田 博（原子力安全システム研究所 (INSS)）

指定討論者：　北村 正晴（東北大学名誉教授・非会員）

概要

事故や災害の発生可能性がある組織において、そのリスクを事前にどのように想定するか、また想定外のリスクが現実化したときそれにどう対応するかという問題は、常に大きな問いかけとして議論されてきた。ただ残念なことに、これらの議論の多くは個別組織の範囲に留まっていることが多かったと思う。今回のワークショップではその反省に基づき、宇宙分野と原子力分野という二つの領域をコラボレーションさせることによって、問題点をより一般化させることを試みる。

宇宙と原子力は、いずれも 50 年ほど前から急速に発展したという、比較的歴史が浅い技術系の分野である。そして両者ともその組織や予算規模は大きく、巨大で先端的で複雑なシステムを構成しているという意味で共通性がある。また内部に潜在的なリスクが存在すること、したがって想定外の過酷事故が発生すると被害が甚大という点でも両分野は類似している。
しかし両者には大きく異なる点もある。たとえばその存在理念に関して、宇宙分野では未知の空間に進出することによって研究成果を挙げることが重視されるが、原子力分野では発電によって国家のエネルギーセキュリティに貢献し、かつ発電によって利益を得るという実利性が重視される。結果として両分野の組織イメージも異なり、宇宙分野は夢のあるポジティブなイメージを抱かせるが、原子力分野はその必要性は認めるが怖いという、ややネガティブなイメージを持たれることが多い。

このワークショップの目的は、私が長年関わってきた宇宙と原子力という二つの組織を対比しながら、巨大・複雑系システムにおける想定問題を議論するところにある。組織の差を超える共通点と相違点は何かという議論を通じて、問題を深化させることにしたい。

WS3 ワークショップ　第 1 日（8 月 28 日）16:20～17:50　4 号館 2F 4203

非言語研究のこれまで，いま，これから

企画者：　藤原 健（大阪経済大学）

司会者：　藤原 健（大阪経済大学）

話題提供者：　藤原 健（大阪経済大学）
横光 健吾（立命館大学）
小川 一美（愛知淑徳大学）

指定討論者：　結城 雅樹（北海道大学）

概要

非言語研究が社会心理学分野で集中的に推し進められたのは第二次世界大戦以降，1960 年代のことである (Knap, Hall, & Horgan, 2014)。Exline による視線の研究，Sommer のパーソナルスペースを初めてとして，Argyle，Kendon，Scheflen，Mehrabian，Rosenthal といった名だたる研究者たちが活躍したのも同時期であった。これに対して遅れること 10 余年，日本でも多くの非言語研究が行われ，実験社会心理学研究をはじめとした学術誌にその多くが掲載された。しかし，対人コミュニケーションや非言語行動を対象とする研究は，主には実験実施および行動変数抽出にかかる費用対効果の面からその研究数は年を追うごとに減少し (Baumeister, Vohs, & Funder, 2007; Patterson, 2008)，2018 年 1 月に行われた SPSP では，約 2,000 件の発表がある中で Nonverbal のカテゴリーで登録された研究はわずか 5 件しかなかった (うち 2 件は小川と藤原によるものであった)。

本企画では，方法論的な困難さを抱える非言語研究について，その過去、及び現状を踏まえると共に，どのような角度からこれを克服し，社会心理学分野の発展に貢献できるのかを議論したい。藤原は，非言語研究の歴史的変遷に触れつつ，行動変数を抽出する最新の方法について報告する。横光は，嗜好品の有無によって対人コミュニケーションがどのように活性化されるのかについて実験結果を報告するとともに、今後の対人コミュニケーション研究における考えを述べる。小川は，非言語研究を俯瞰的に捉える立場から非言語行動の知識を対象とした研究を報告し、さらに非言語研究の今後の方向性に関する考えを述べる。

指定討論の結城先生には，社会生態学的な視点からコメントを頂き，非言語研究が目指すべき今後の理論的展開を描きたい。さらに，フロアとの質疑応答を通して，非言語研究あるいは対人コミュニケーション研究において欠けている点を精査すると共に，今後期待される展開について明確にしていくことを目指す。

WS4 ワークショップ　第 2 日（8 月 29 日）16:10～17:40　2 号館 4F 2402

「地域の幸福」の多面的測定：地域内外の社会関係資本からの検討

企画者：　内田 由紀子（京都大学）

司会者：　福島 慎太郎（東京女子大学）

話題提供者：　内田 由紀子（京都大学）
一言 英文（福岡大学）
箕浦 有希久（同志社大学）

指定討論者：　前野 隆司（慶應義塾大学・非会員）

概要

これまで地域の状態を測定する手法としては経済状態や人口動態などのマクロ要因で測定が行われるか、あるいは住民の個人の状態の平均値を用いて（たとえば満足度や幸福度の平均値）測定されることが多かった。しかし、実際には地域の文化価値などを含むマクロな状態と個人の状態は相互作用するものであり、同時に検討ができるようなフレームワークや測定が必要である。本ワークショップは地域の指標が「モノの豊かさ」から「こころの豊かさ」にシフトしている中、JST RISTEX が実施する「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域の研究開発プロジェクト「地域の幸福の多面的側面の測定と持続可能な多世代共創社会に向けての実践的フィードバック」（研究代表者：内田由紀子）において H27 年度より実施している取り組みの中から、いくつかの知見を紹介する。最後に社会心理学とは異なる立場（システムデザイン・社会工学・幸福学）から、一連の研究についての考察をいただく。

発表 1 においては、西日本の約 500 集落をサンプリングした調査から、地域内の信頼関係が地域の開放性（ほかの土地に住む人や、移住者への開放的な態度）や幸福感と関連する研究の知見を紹介する。また、地域内信頼が地域の幸福とかかわることが日米で見られる一方で、地域内信頼と開放性との関連においては日本で確認されるような正の関係が北米では見られないというデータを示し、こうした差異が現れる原因（調整要因）について検討を行う。発表 2 においては、26 集落を対象とした生活環境の評定（集落内にある住居の様子等）と、集落住民からサンプリングされた心理調査データと紐付けした検討の結果から、農村的な特徴を持つ地域では地域行事活動への参加と町外他者とのかかわり人数が多くあるという点で地域内の結びつきと開放性が両立し、地域内住民との水平的な関係性があることなどが示された調査の結果を提示する。発表 3 においては地域の幸福を支える要因としての京都市内（学区のまとまりが強い都市的地域）ならびに京丹後市（農村地域）や岩手県滝沢市（移住者が多い地域）における聞き取り調査をもとに、地域の開放性を支える促進要因と阻害要因を考察する。最後に、地域をささえる内部での信頼関係と開放性・多様性をみとめる状況が発生する要因についてのディスカッションを行う。

WS5 ワークショップ　第 2 日（8 月 29 日） 16:10～17:40　2 号館 3F 2301

ポジティブ心理学は社会心理学にどのような示唆をもたらすか？：強み研究に焦点を当てて

企画者：　竹橋 洋毅（関西福祉科学大学）・吉野 優香（筑波大学）・島井 哲志（北星学園大学）

話題提供者: 久保 尊洋（筑波大学・非会員）
吉野 優香（筑波大学）
津田 恭充（関西福祉科学大学・非会員）

指定討論者: 大坊 郁夫（北星学園大学・名誉会員）
島井 哲志（北星学園大学）

概要

ポジティブ心理学は、人のもつさまざまなポジティブな心の働きに注目する研究・実践のムーブメントである。欧米ではポジティブ心理学に基づく健康増進や教育活動などが広まりつつあり、わが国においてもポジティブ心理学は公認心理師資格のために教えるべき事項に含まれており、その重要性は認識されつつある。ポジティブ心理学では人の長所や人徳が中心的なテーマのひとつであり、それらをまとめて人格的強み(character strengths)と呼ぶ。Peterson らは様々な文化に共通する普遍的な強みとは何かについて検討した上で、一定の基準をクリアした 24 種類の人格的強みを記した 800 ページにおよぶハンドブックを作成している。

人格的強みの研究は、単に「どれくらいポジティブであるか」という抽象度の高い視点（例えば、自尊心）を超えて、「どのような意味においてポジティブであるか」というより具体的な特性に焦点をあて、その特性がもつ性質・機能について明らかにしようと試みるものである。例えば、Duckworth と Peterson ら（2007）の研究では、グリット（長期目標への情熱と根性）がセルフコントロール、勤勉性、知的能力よりも長期的な成果を予測する可能性が示唆されている。このような具体的な特性に着目したアプローチは、人間行動の説明・予測・制御の精度を向上しうるという点において有用であると考えられる。

本ワークショップでは、人のもつ具体的なポジティブな資質に関する最先端の研究成果を共有し、それらが社会心理学にもたらす示唆について議論したいと考えている。はじめに、竹橋洋毅氏が人格的強みの研究動向と企画趣旨について説明する。その後、3 人の話題提供者から、個別的な強みについての研究成果を共有いただく。久保尊洋氏からは「熱意」、吉野優香氏からは「感謝心」、津田恭充氏からは「謙虚」の強みについての知見を紹介いただく。指定討論者としては大坊郁夫氏と島井哲志氏から、強み研究の「社会心理学への貢献可能性」という観点からディスカッションいただく。最後に、フロアの皆さんとの議論を通じて、強み研究の意義と面白さについて共有したいと考えている。

WS6 ワークショップ　第 2 日（8 月 29 日）16:10～17:40　4 号館 2F 4203

多角的検証に根ざした社会心理学の新たな可能性に向けて：
―若手による若手のための―

企画者：　仁科 国之（玉川大学）・須山 巨基（北海道大学）

司会者：　須山 巨基（北海道大学）

話題提供者：　松永 倫子（京都大学・非会員）
仁科 国之（玉川大学）
高橋 奈々（慶應義塾大学・非会員）

指定討論者：　竹村 幸祐（滋賀大学）

概要

社会心理学は主要なトピックの多角的な検証のために学際的な交流を定期的にもち、その中で活発な議論をおこなうことで新たな分野を開拓してきた。たとえば、社会心理学の黎明期では物理学と接触して集団力学を創始し、計算機科学の発想から社会認知を立ち上げた。ほかにも経済学（協力）、人類学（文化）、生物学（進化）、認知科学（神経）などとともに、新たな理論や実験方法を模索し社会科学的に重要な知見を数多く生み出してきた。

本学会においてもこうした理論や方法論の多様化によって生まれた知見や発展した問いなどが活発に議論されている。しかし、他領域の研究者と能動的に交流を持とうとしなければ、新しい動向や、改良された方法などを継続的に知ることはできない。そこで本ワークショップでは発達・神経・生物科学における若手の研究者をよび、彼らが行っている最新の研究を紹介してもらう。そして、他領域の関心や使われている手法を学ぶとともに他領域の研究者と接する機会を設け、社会心理学的な問いをより多角的に探求できるようなプラットフォームの構築を目指す。

最初の発表者である松永氏は母子関係における養育経験について発達科学の視点から研究しており、本発表では母親の心身の変化にオキシトシン、自律神経系の反応、情動処理がどのように関連しているか最新の研究を紹介してもらう。次の発表者である仁科氏は神経科学の観点から信頼のメカニズムを検討しており、オキシトシン受容体遺伝子が信頼行動にどのような影響を与えるか検討した一連の実験を紹介してもらう。最後の発表者である高橋氏は生物科学、とりわけ行動生態学の視点から性差の研究を進めており、本ワークショップではカラス科における社会的優劣順位に対する敏感さや闘争、親和行動の性差について言及し、それらの行動が進化した理由について考察してもらう。いずれの発表も社会心理学者にとってわかりやすいかたちで発表してもらい、どのようにしたら彼らのバックグラウンドである発達・神経・生物科学と社会心理学が今後融合できるかについて言及してもらう。そしてこれらの発表を受けて、指定討論者である竹村氏から社会心理学の立場からのフィードバックを得たいと考えている。